長崎県の埋蔵文化財

長崎県埋蔵文化財センター
Nagasaki Prefectural Archaeological Center

はじめに

埋蔵文化財は、国民共有の財産であると同時に、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産です。文字どおり「土地に埋蔵されている文化財」のことで、「遺構」と「遺物」がこれにあたります。この「遺構」と「遺物」が含まれた土地を「埋蔵文化財包蔵地」と言い、それを一般的に「遺跡」と言います。

長崎県には約 3,800 ヶ所の遺跡があります。本県は平野が少なく山がちな地形で、離島も多いため、大規模な遺跡が比較的少ない地域です。一方、海浜部や海底など海に面した水中遺跡の数は、沖縄県に次いで全国第２位であり、本県の遺跡の大きな特色と言えます。また、日本の本土最西端で、中国や朝鮮半島と近い距離にあり、遺跡からの出土遺物は、それらの地域から持ち込まれたものや、その影響を受けて作られたものが多く見られます。元寇に関する遺物が海底に沈む鷹島海底遺跡や、島原の乱の壮絶な舞台となった原城跡、鎖国政策の下で海外との交易の窓口となった出島跡など、日本史に登場する歴史的事象の証となる遺跡が多いことも本県の特徴と言えます。

本誌では、これまで長崎県教育委員会が発掘調査に関わった県内の代表的な遺跡をご紹介します。

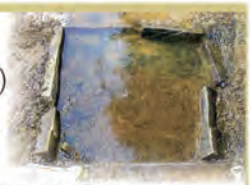
百花台遺跡群（雲仙市）

火山灰から旧石器の変遷がわかる遺跡群

島原半島北東部の山麓地の段丘崖上に立地する遺跡群である。調査は1963年から約30年あまり、県や大学等の研究機関により行われ、厚く堆積する火山灰層の中に旧石器が包含されることがわかった。特に、24000年前に噴火した鹿児島湾最奥部の姶良カルデラの噴出物である姶良丹沢火山灰（AT）や、6400年前に噴火した鹿児島県硫黄島付近の鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）と呼ばれる、広域に降下した火山灰が確認されている。

このように鍵となる土層によって年代が確認され、各層位ごとに良好な石器組成が把握できることから、旧石器の編年研究の基準資料となる重要遺跡である。

越高浜遺跡（対馬市）



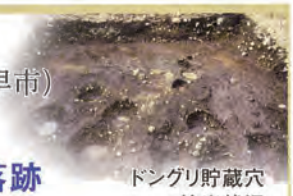
日韓交流がわかる海岸遺跡

対馬市北西部の越高集落海岸沿いにある遺跡である。1976年に長崎大学医学部によって調査が行われ、厚さ40～60cmの礫混じりの黒褐色砂質土の地層に遺物が確認され、縄文土器より圧倒的に韓国系土器が多いことが報告されている。

1978年には上県町によって、1996年には県によって調査され、多量の韓半島新石器時代土器が出土している。近年、対馬市と熊本大学が合同で行った調査では石組みの炉跡が検出されている。

遺跡は対馬海峡を挟み韓国と対峙する対馬西岸域にあり、韓国との交流が7000年前まで遡ることを示す貴重な遺跡である。

伊木力遺跡（諫早市）

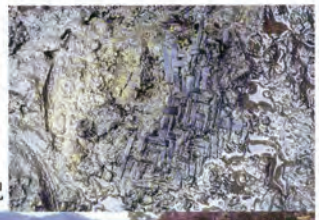


ドングリ貯蔵穴検出状況

丸木舟が出土した大村湾沿岸の広大な集落跡

大村湾の伊木力川下流の低地部にある集落跡である。1985年の多良見町と同志社大学による調査では、縄文時代前期の轟式土器と曽畑式土器の良好な資料が発見された。丸木舟といわれる大型木製品や、ヤマモモ等の植物遺体などが共に出土している。

1993～1995年の県による調査では、縄文時代前期のドングリ貯蔵穴22基、後期初頭の貯蔵穴3基が検出された。これらの遺構には土器とともに、石器や玦状耳飾り、大珠といった装飾品が出土している。大村湾沿岸で海を介して生活していた縄文人の暮らしの様子を物語る遺跡として評価されている。



網代出土状況

宮下貝塚（五島市）

北久根山式土器

大型の縄文土器が出土する五島列島沿岸の貝塚遺跡

福江島の南に突出する溶岩により形成された半島の付け根部分で、富江湾南西の海浜部に位置する。1965年に長崎大学医学部解剖学教室、別府大学、富江町などによって発掘調査が行われた。また、1995年には富江町により発掘調査が実施されている。

貝塚では5つの層位が確認され、1層は縄文時代後期、2層は縄文時代中期から後期、3層は縄文時代前期である。遺物の主体は後期の資料であり、質・量共に他の時期の資料を上回っている。また、貝塚の中には6体の縄文時代の人骨が発見されており、楕円形の土坑の中に10本の打製石斧が集積された遺構も検出されている。

黒丸遺跡（大村市）

農耕の始まりが想定される広大な集落遺跡

郡川流域の扇状地に立地する縄文時代から中世にかけての広範囲な複合遺跡である。古代条里制の地割が残る場所でもあり、律令体制下の彼杵郡の郡衙所在地の候補にもあげられている。

1977年に発見され、大村市によって1979年まで調査が実施された。遺跡からは各時期の遺物が出土しているが、集落の始まりは縄文時代晩期に求められ、晩期の墓地と多量の扁平打製石斧が出土している。扁平打製石斧は土掘り具と考えられており、農耕との関わりが推測される。湿地帯に接した遺跡の立地と併せてこの区域に初期水稲耕作の存在が想定されている遺跡である。

景華園遺跡（島原市）

大きな標石の下に青銅器が副葬される弥生墳墓遺跡

島原半島北東部の有明海に面した丘陵上に立地する弥生時代の遺跡である。遺跡発見の記録は古く、元禄12（1699）年、島原藩日記である「深溝世紀」に銅剣2本が発見されたとの記事がある。昭和初年に土砂採取の際に甕棺が出土し、1927年に甕棺と布片、玉類、1959年に甕棺と銅剣・管玉及び鉄製鏃先出土など、これまで墳墓を中心に重要な遺構・遺物が発見されている。

島原半島における弥生遺跡において、青銅器が出土した遺跡は少なく、墓制においても甕棺の上に大石を乗せる構造は極めて珍しい。このように手厚く葬られた被葬者は地域の有力者で、そのことから統治された小国家（ムラ）が存在したことが推測される。

諫早農業高校遺跡（諫早市）

北部九州の特色をもつ諫早市街地の弥生拠点遺跡

小児甕棺墓出土状況

有明海西部の諫早平野の最も奥まった低丘陵上にある弥生時代を中心とした遺跡である。明治時代の学校建設の際に弥生時代の甕棺墓と細形銅剣が発見されたと伝えられており、銅剣はその後長崎県立美術博物館に保管されていた。また、グラウンド造成時には濠跡が確認されたという話もあり、環濠集落が存在した可能性もある。

2017年の県による発掘調査では、弥生時代中期前葉から中葉にかけての小児甕棺墓が出土しており、銅剣の時期とつながる遺構と考えられる。

原の辻遺跡（壱岐市）

一支国の国邑、多重環濠の大規模集落跡

壱岐島の広大な水田地帯に広がる約100haに及ぶ遺跡である。明治時代に発見され、大正時代になり地元郷土史家により学会に紹介され注目されるようになった。

最初の調査は1948年から東亜考古学会によって行われた。また、1974年には県により石田大原地区で調査が行われ、弥生時代中期頃の墓域が確認された。1993年以降は圃場整備に伴い発掘調査が実施され、多重環濠が巡る大規模集落であることが判明し、1996年には大陸の土木技術で作られた船着き場跡が発見され注目された。中国の歴史書「魏志倭人伝」に記載された「一支国」の国邑が特定された重要な遺跡であるとして2000年に国特別史跡に指定されている。

船着き場跡検出状況

前島古墳群（時津町）

大村湾にある弥生時代から古墳時代の墓地の島

大村湾南西部に位置する前島とその属島に8基の円墳が築かれている。1990年に遺跡整備を目的として時津町と県によって3基が調査された。3号墳は直径8m、高さ2mの円墳で、単室の横穴式石室を持つ。4号墳は直径5m、高さ1m程の円墳で横穴式石室を持つ。その他4基の古墳は直径が5～7m、高さ1m内外の円墳である。副葬品は少なく、須恵器が見られる程度である。須恵器は6世紀後半から7世紀後半に使用されたものと推定されている。前島には弥生時代の箱式石棺墓が5基確認されており、弥生時代から古墳時代にかけて墓地として利用された島であると考えられる。

上篠原遺跡（雲仙市）

高校生の手で確認された古墳時代の祭祀遺跡

雲仙岳山麓から緩やかに延びる標高30～40mの丘陵上に立地する。1967年に発見され、出土した陶質土器と土師器は県立国見高等学校に収蔵されていた。1985年に発見地の開発が行われることから、国見高等学校考古学研究部により調査が実施され、竪穴住居跡などが検出された。竪穴住居跡は隅丸方形で、住居内から膨大な量の高坏・壺などの供献用土器が出土したことから、祭祀遺構の可能性が考えられている。

朝鮮半島の三国時代の伽耶系の陶質土器を伴う4世紀末から5世紀初頭の良好な遺物群が出土しており、島原半島の古墳時代中期の標式的な遺跡として位置づけることができる。

五万長者遺跡（雲仙市）

古代寺院が推定される官道沿いの建物跡

雲仙岳北麓の緩やかな丘陵上に立地する古代の遺跡である。この地域には古くから「五万長者」伝説があり、古瓦を出土するこの遺跡がその屋敷跡と伝承されてきた。1970年に国見高等学校・島原工業高等学校合同の「五万長者屋敷調査団」が調査を実施している。1995年には、県が調査を実施して、造成された版築状の遺構や土師器杯を伏せた祭祀遺構が検出され、古代の土師器、須恵器、瓦などが出土している。

出土した瓦については、8世紀中頃と推定され、同様な瓦は、大宰府を除いて寺院跡以外の出土がないことから、寺院の建物跡の可能性が高いと考えられている。

大浜遺跡（五島市）

弥生時代の牛と古代の交流が残る海浜遺跡

福江島の鬼岳の西側海浜部に立地する縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。

大正時代に発見され幾度となく調査が実施されたが、1962～1963年に県を中心に編成された五島遺跡総合調査会により行われた調査では、弥生時代の墓坑群と牛歯が発見された。1997年の県の調査では古代から中世にかけての遺物が多量に出土している。遺跡での採集資料には墨書土器も含まれており、古代における官衙的な性格の遺跡と考えられている。

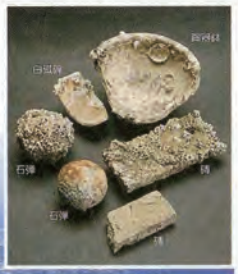
また、8世紀頃の新羅印花文陶器の出土は朝鮮半島との交流を示唆する重要な資料である。

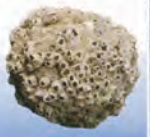
鷹島海底遺跡（松浦市）

蒙古襲来の元船が海底に沈む海底遺跡

鷹島南岸の海底約5～20mにある元寇関係の遺物が出土する海底遺跡である。古くから多量の壺等が引き上げられていたが、1980年から行われた調査により、1281年の「弘安の役」の際の大暴風雨によってほぼ壊滅したという元寇に関連する遺跡であることが判明した。これまでの調査で船材や碇石、「てつはう」などの武器や武具など約4000点の遺物が出土している。

2011年に神崎地区で行われた琉球大学の調査では構造のわかる元寇船が確認され、翌年、日本で初めて水中遺跡として国史跡指定を受けた。





ホゲット石鍋製作地跡（西海市）

古代から中世に広範囲に流通した石鍋工房跡

西彼杵半島中央部、標高約120mの山間地にある石鍋製作地跡である。1977年大瀬戸町が主体となり調査が実施された。遺跡は雪浦川の上流にあたり、これまでに11ヶ所の石鍋製作跡が確認されている。

滑石の岩壁は大規模なもので長さ60m、高さ8mにも及ぶものもあり、滑石の岩壁にノミで切り込んで岩塊を削りだし、石鍋の粗型の粗加工を行っている痕跡が多数残っている。西彼杵半島を中心に作られた石鍋は、関西から沖縄まで広範囲で流通している。

坂口館跡（大村市）

日本最初のキリシタン大名 大村純忠終焉の遺跡

日本最初のキリシタン大名である大村純忠の終焉の居館跡で、大村市の史跡に指定されている。もともと大村家の重臣の屋敷であったが、純忠が隠居所を構えて晩年を過ごし、1587年に55歳の生涯を閉じた場所である。これまで県や大村市の調査で中世から近世にかけての建物跡が検出されているが、当時の居館の建物として明らかな遺構は確認されていない。ただ、出土した陶磁器のうち7割近くは輸入陶磁器であり、純忠の屋敷地であることは間違いない。

現在、泉水を中心とした石組み庭園跡は整備され公園となっている。

万才町遺跡（長崎市）

近世長崎の街並みと商家の姿が残る都市遺跡

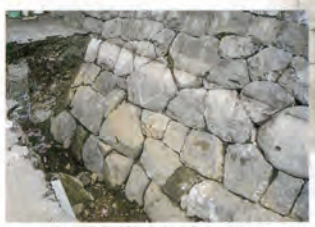
胞衣壺出土状況

万才町遺跡土倉検出状況

長崎の中心部で、港に突き出した台地上にあり、1571年に大村領主大村純忠が長崎の町割りを行った六カ町の一角である。寛文年間に描かれた絵図には、瓦屋根の土蔵や板葺きの建物などが描かれており、当時は町屋や商家が立ち並んでいたと推測される。1993年の県の調査では、狭い範囲ではありながらも多数の柱穴跡があり、8棟の建物跡が復元できた。また、火災後の廃棄土坑や整理土坑、井戸跡などがあり、中からはおびただしい数の陶磁器等の遺物が出土している。また、幕末には赤絵を中心に輸出向けの陶磁器を取り扱った商家の跡が確認されている。

西役所跡（長崎市）

長崎奉行所から県庁までの歴史を物語る遺跡



江戸時代石垣検出状況

明治期　旧県庁基礎検出状況

南に出島を見下ろす高台で、岬の教会から長崎奉行所跡、海軍伝習所跡、旧県庁と長崎の政治の中心として機能してきた場所である。これまで本格的な調査は実施されていないが、2010年、県により周辺の石垣と敷地内の14ヶ所において範囲確認調査が実施された。

石垣は後世の積み直しはあるものの、地中にある根石部分に江戸時代の石積みが確認された。敷地には石垣や石組側溝などの奉行所に関する遺構と、明治期に建てられたレンガ造りの旧県庁の基礎が残っており、輸入陶磁器や角皿など役所としての特徴的な遺物も出土している。

TOPIC

発掘された竹松遺跡

竹松遺跡とは

竹松遺跡は大村市北部の郡川流域にある約11万㎡の広大な遺跡です。古くから土器や黒曜石の散布があり遺跡があることが知られていましたが、九州新幹線西九州ルートの建設に伴った大規模な発掘調査によって遺跡が形成された長い歴史が明らかになってきました。数多く発見された生活の跡や道具などは、竹松遺跡が縄文時代から江戸時代まで連続して人々が生活した場所であったことを物語っています。

弥生時代の大規模な墓地

多数の甕棺墓や石棺墓が発見されました。墓標を持つ墓や赤く色づけされた墓、石棺内に装身具であるガラス玉と管玉が残っている墓などが発見され、周辺には葬送に伴う祀りの跡が確認されました。祀り跡には土器が納められており、焼けた人骨なども見つかっています。弥生時代には火葬は一般的ではなく、何か特別な理由があったと考えられます。これらの遺構は、弥生人の死生観の一端を私たちに教えてくれます。

赤く色づけされた墓

小型仿製鏡

標石のある墓

古代の郡衙の存在（奈良時代）

長崎県と佐賀県は肥前国といい、大村湾一帯を彼杵郡と言っていました。肥前国衙が県庁、彼杵郡衙が市役所としての役目を持っていました。竹松遺跡では、文字が書かれた土器や、硯の破片や役人のベルトにつける石飾り（石帯）、重さをはかるためのおもりなどが出土しており、近くに役所の存在を感じさせます。

石帯（巡方）

権衡（おもり）

カムィヤキの発見（鎌倉時代）

11世紀後半から14世紀にかけて鹿児島県奄美群島の徳之島で作られた焼き物です。琉球列島を中心に出土し、これまで最北の出土地は鹿児島県出水市でしたが、竹松遺跡で出土しました。（長崎県初出土）

カムィヤキ

長崎県埋蔵文化財センター　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地1　TEL:0920-45-4080　FAX:0920-45-4082
http://www.nagasaki-maibun.jp/index.html

2020年3月発行